

氏 名	おおさきのりこ
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第350号
学位授与の日付	平成18年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目	チュルク語・モンゴル語の使役と受動の研究 ——キルギス語と中期モンゴル語を中心として——

論文調査委員 (主査) 教授 庄垣内正弘 教授 田窪行則 教授 吉田和彦

論文内容の要旨

チュルク語は、中央アジアを中心に、西は黒海沿岸、ヴォルガ川流域、東は中国新疆地方、東シベリアにかけて、ユーラシア大陸を横切る広大な地域に分布する言語である。チュルク語には30に近い方言が認められており、その話者総数は1億2000万人に及ぶ。キルギス語は、チュルク語の方言の一つで、東西に長く帯状に広がるチュルク語の分布域の中でほぼ中央付近に位置している。天山山脈の北麓に国土を有するキルギス共和国を中心に、周辺のカザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、中国新疆ウイグル自治区などに約260万人の話者をもつ言語である。

チュルク語は膠着語的構造をもつ言語として知られている。すなわち、語幹に接辞が付くことで新しい形式を生み、そこに更に接辞が付け加えられて、また新たな形式が生まれるという構造をもつ。チュルク語における使役や受動の表現も、一般に、動詞語幹に派生的な接尾辞を付加する形式によって示される。数多くの方言と広大な分布域をもつチュルク語でも、使役接尾辞や受動接尾辞の形式や機能について、各方言の間に大きな差異は見られない。

だが、使役や受動の表現を細かく見ていくと、各方言の間には少しずつ違いがある。チュルク語では基本的に使役表現と受動表現が形式の異なる別個の接尾辞によって示されるが、ときに使役文が受動の意味を表す場合もある。このような使役や受動の形式の現れ方、それぞれの表現の用いられ方、また、両表現の重なり合い方というのは、それぞれの方言で少しずつ異なっている。その違いのありさまは、プリズムを通して現れる光のスペクトログラムのような様相を呈している。

現代のチュルク語がもつ使役や受動の形式と、使役文が受動の意味を表すというような現象は、7世紀末～9世紀半ばの碑文に記された突厥文字文献にまで遡ることができるという長い歴史をもつものである。そこから千数百年を経て広大な地域に進出し定着した現代のチュルク語各方言に、それがどのように受け継がれているのかを知ることは、未だ謎の多いチュルク語の方言分布形成のプロセスを探るヒントになると思われる。

この研究では、このようなチュルク語における使役の形式と受動の形式の現れ方を考察し、その全体像を明らかにすることを目指す。広大にして多様なチュルク語の姿を的確に捉えるためには、比較の標準となる確実な言語データが必要である。本論文では、チュルク語の全体像を正確に捉えるための確実な比較標準として、キルギス語を取り上げ、その記述に努める。東西に長く帯状に広がるチュルク語の分布域のほぼ中央に位置するキルギス語のデータは、チュルク語における方言ごとの様相の違いを明らかにするための比較標準として、適したものであると考えるからである。

そして、このキルギス語を中心とするチュルク語の観察から明らかになるのは、チュルク語内部での方言差を形成する大きな要因の一つに、他の言語との言語接触が深く関わっているということである。特に、使役や受動のような表現については、構造的に非常に類似した隣接言語であるモンゴル語との関係が常に指摘されてきている。チュルク語とモンゴル語は、長い歴史の中で常に密接な接触を繰返し、互いに影響を与え合ってきた関係にあることは間違いない。南シベリア地域、モンゴルの北側に位置するアルタイ地方のロシア連邦トワ共和国で用いられるトワ語では、特にモンゴル語の強い影響の痕跡が明白に観察される。そこで、チュルク語とモンゴル語は、相互に類似した現象が見られる場合には、一方が他方に影響を

与えた結果であるとか、あるいはアルタイ語仮説の立場から、アルタイ祖語に遡る現象である可能性が指摘されることなどが多かった。しかし、このような指摘は、現代語の比較から得た直感や印象に基づくもので、具体的な証拠に基づいて行われたものではなかった。

キルギス語については、移動を旨とする遊牧民族の言語であることから、中世の文献資料はほとんど残されていないが、モンゴル語については、元朝時代の13世紀以降、文語の確立に伴って、多くの文献資料が残されている。特に、13-16世紀に書かれたと言われる『元朝秘史』は、チンギス・ハーン一族の歴史を描いた膨大な資料を含むもので、ここで用いられた言語の姿をある程度特定できるほどの豊かな情報量を具えた資料である。この『元朝秘史』で用いられた言語は、中期モンゴル語と呼ばれるモンゴル語の発展段階に属するものであるが、ここに見られる受動表現は、現代モンゴル口語の用法とは、相当に異なることが知られている。これまで『元朝秘史』の言語における受動文の特徴を明らかにしようとする試みが、いくつか行われてきたが、チュルク語との関係を考察するに足るような十分な分析が行われてきたわけではない。本論文では、『元朝秘史』の言語に見られる使役、受動の表現をつぶさに拾い上げ、それがどのような言語構造に基づくものであったのかを明らかにする試みを行った。そこで明らかにになる『元朝秘史』の言語における受動文の特徴と構造は、現代のチュルク語とモンゴル語の現れ方から単純に想像される相互の影響関係を、一から見直す必要性を訴えるものである。

本論文の大まかな構成は、以下の通りである。まず、第1章でキルギス語の使役文について、記述と考察を行い、数多くある使役接尾辞を形態論的に整理した上で、キルギス語の使役文の構文的な特徴について述べる。次に、第2章で受動文を考察し、受動接尾辞の形態論的な特徴を見た上で、いくつかの異なる種類の受動文があることについて述べる。特に、意味上の動作主体が、受動文においてどのように表示されるかという問題に丁寧に取り組むことによって、更に新たな種類の受動文を抽出できることを示した。続く第3章では、キルギス語に見られる、形式的には使役であるが意味的には受動の意味をもつという場合について、他のチュルク語と比較しながら、その現れ方を観察する。チュルク語のうち、非常に特異な振る舞いを見せるトワ語については、特に1節を設けてモンゴル語との言語接触の影響について議論を行った。ここで提起される問題意識を基に、第4章では、『元朝秘史』の言語に見られる受動文や、使役文による受動的な表現を観察し、『元朝秘史』に用いられた言語がどのような言語であったのかを考える。

以下に、各章で行った具体的な考察内容を簡潔にまとめる。

第1章 キルギス語の使役文

非常に豊かな種類をもつキルギス語の使役接尾辞を7種類に分類し、それぞれの分布傾向を形態論的に整理した。動詞語幹にこれらの使役接尾辞が付いた派生動詞を述部にもつ使役文について、その構文特徴を考察した。キルギス語の使役文には、自動詞に基づくものと他動詞に基づくものがある。それぞれの使役文について、被使役主体がどのような格表示を受けるか、また、多くの種類をもつ使役接尾辞の接続によって形式の異なる動詞使役形が競合する場合にどのような意味的な差異があるかについて考察した。そこに見られる意味的な差異は、形式の違いと1対1に対応せず、さまざまな差異のパターンをもつことが分かった。また、使役接尾辞が二重に接続した形式をもつ二重使役文では、「中間の使役主体」という参与者の増加を表す場合と、参与者の増加を意味しない場合とがあり、後者では使役主体が被使役主体による行為の実現に強く関与しているかどうかという意味的な違いに結びついていることを指摘した。このような意味的な差異が、モンゴル語と共通して見られるものでありながら、形式との対応ではまったく逆の対応を見せることについても述べた。また、使役文が受動的・再帰的に用いられる場合についても簡略に述べた。

第2章 キルギス語の受動文

まず、キルギス語の受動文には、典型的な受動文のほかに、中間態構文や無人称受動文、自動詞受動文など、異なる種類の受動文があることを述べた。最後の自動詞受動文は、受動接尾辞が付加されても動詞が取る補語名詞句の格表示に変化をもたらず、意味的には、動作に関与する別の主体の存在を含意するというもので、これまでほとんど指摘されていなかった構文である。そして次に、他動詞に基づく典型的な受動文を中心に、意味上の動作主がどのような方法によって表示されるかという問題について考察した。キルギス語の受動文における意味上の動作主の表示方法には、与格、奪格、後置詞によるものという3つの方法があるが、どの表示方法が許容されるかは動詞ごとに異なっており、それぞれの表示方法には、それぞれの特質に基づく制約がある。それぞれの出現条件を検討した結果、後置詞による動作主表示は、話し言葉的ではなく

文章語的な性質をもち、語彙的な制限なしにほとんどすべての動詞について用いられることができるという点で、他の動作主表示とは別格の地位にある動作主表示であることが分かった。そして、キルギス語の受動文においては、与格による動作主表示が基本であることを確認し、それが事態の原因や動作の起点を表す場合に限って奪格による動作主表示が成立することを述べた。そして、与格、奪格いずれの場合も、能動文において動詞に必須の要素として与格名詞句や奪格名詞句をとる場合には、それらの意味が対応する受動文においても保持されるため、それぞれの格表示による動作主表示が成り立たないことを例証した。しかし、ごく一部の動詞には、これらの制約に反して動作主を表示できる場合が確認でき、それらが受動接尾辞の接続によっても動詞の結合価が減少しない特異な受動文を構成し、他の受動文とは別個のカテゴリーに属する受動文である可能性を示した。また最後に、動作主とは言えない能動文の主語が、対応する受動文において与格で示される場合があり、これが奪格とは異なる与格の性質を表したものであることも述べた。

第3章 チュルク語において使役文が受動の意味をもつとき

キルギス語だけでなくチュルク語全般に見られる使役文が受動の意味を表すという現象を整理し、まず、「受動の意味を表す使役文」の下位分類を行った。次に、分類されたタイプごとに、その構文特徴や成立条件を検討した。直接受動に相当する使役文は東方のチュルク語を中心に観察され、キルギス語では衰退傾向にあるという変化傾向が確認された。これに対して間接受動に相当する使役文は、ほとんどすべてのチュルク語に観察される。キルギス語では、動詞の意味に被害や迷惑を引き起こすような事態の意味が含まれており、かつ直接の被害が自己の所有物に対するものである場合にだけ間接受動に相当する使役文が成立する。このような「受動の意味を表す使役文」の本質を、チュルク語だけでなく、モンゴル語や朝鮮語、日本語などを比較対照の範囲に含めて考察し、更に、第2章でのキルギス語の受動文についての考察結果とあわせて動詞価の増減という観点から整理すると、そこにはキルギス語の使役—受動のシステムの中に異質な二重の体系の混在が認められることが分かった。この二重性が、古代チュルク語の言語特徴の残存であるという仮定の基に、古代チュルク語に見られた「受動の意味を表す使役文」や、古代チュルク語での受動文の現れ方を考察した。古代チュルク語の時代には、現代の「被害受動」というカテゴリーに繋がる特異な受動接尾辞が存在したことを述べ、現代のキルギス語に認められる「被害受動」のカテゴリーの存在について論じた。そして最後に、チュルク語の中でも極めて特異な使役—受動の体系をもつトワ語について、トワ語に影響を与えたとされるモンゴル語との関係を考察した。

第4章 『元朝秘史』の言語にみられる受動文

現代語には見られない特徴をもつと言われてきた『元朝秘史』の言語の受動文を、類似の受動文をもつ現代の日本語と対比させながら、その体系を整理した。ここでの主張の柱は、従来の研究者が「自動詞の受身」という間接受動文の一つとして捉えていた受動文のうちに、与格受動文として理解すべきものが含まれているということと、『元朝秘史』の言語における受動接尾辞に、他の言語には見られない「節」を包む形で接続する節接辞型の受動接尾辞が存在すると考えられることである。このような新しい理解によって、従来の研究では説明できなかった現象や構文の多くが説明可能になることを、具体例をあげて示した。また、『元朝秘史』には使役文によって受動の意味を表していると考えられる場合があり、これについても具体例の検討を行った。その結果、類似の状況を描く場合に使い分けられる動詞使役形と受動形の違いが、アスペクトの違いにあるという主張を行った。そこには、影響を受ける場合の直接性と間接性は、動詞の形態上区別しないが、使役の直接性と間接性の区別には敏感で、それを動詞の形態上区別するという『元朝秘史』の言語の特徴が関わっているということ述べた。そして最後に、『元朝秘史』に見られる使役文と受動文が統語的に並行性をもつことを確認し、本章で行った節接辞型受動文の存在という新しい主張が、言語全体の体系の中でも整合性をもつものであることを述べた。

以上のような本論文での考察の結果、『元朝秘史』に用いられた言語が、現代のモンゴル語とどの程度直接的な連続性をもつものかという点には不確定要素があるとしても、両者間の受動文の体系には、相当に大きな隔たりがあることが具体的に確認された。チュルク語との関係でも、それぞれの言語に層をなし、かつ混ざり合った言語変化の層は非常に複雑であって、単純な「相互の影響」などということは決して言えないということが明確になった。

なお、本論文では終始、「日本語の使役や受動との対比」という観点から考察するという姿勢を貫き、使役や受動に関する日本語研究の成果を念頭に置いた比較対照を行った。日本語は、チュルク語やモンゴル語と同じく SOV の語順による膠着型の言語で、使役や受動の表現には動詞語幹に使役接尾辞や受動接尾辞を接続させる形式を用いるなど、非常に似通った

構造をもつ。近年盛んな使役表現に関する類型論的な論考では、さまざまに構造の異なる言語を比較対照して、それぞれの言語の類型論的な特徴を明らかにするという研究が積み重ねられているが、ある言語の特徴を正確に捉えるためには、構造の類似した言語間での比較対照を行わなければ、繊細なレベルでの特徴を引き出すことはできないと考えられるからである。

論文審査の結果の要旨

チュルク語は、中央アジアを中心に、東シベリアから黒海沿岸にかけて帯状に分布する言語で、30種近い方言群から構成されている。本論文の論者はそのうち天山山脈の北麓に位置するキルギス共和国やその周辺で使用されているキルギス語を主たる対象として、その使役と受動の表現について考察した。

キルギス語の使役と受動表現の類型論的な特質を明らかにするために、論者は他のチュルク語やモンゴル語、さらに日本語との対比を行っている。これらの言語は、SOVの語順をもつ膠着型の言語で、似通った構造をもっている。構造的に類似した言語間での類型論的比較研究が詳細な言語特徴を導き出すという論者の主張は本論文の使役・受動表現の議論を通して容認可能なものとなっている。

本論文(和文A4判295頁)は、序章、第1章：キルギス語の使役文、第2章：キルギス語の受動文、第3章：チュルク語における使役と受動、第4章：『元朝秘史』の言語にみられる受動文、第5章：結語の全六章から構成されている。本論文の内容の特色は以下の四点に要約することができる。

(1) 一般に、使役とは、ある主体が何らかの行為によって他の主体の位置変化や状態変化などの出来事を引き起こすことを意味する概念である。チュルク語には、この使役を表現する方法がいくつかあるが、論者は、使役表現のうち、動詞語幹に使役接尾辞が付加された形式を述部にもつ文のみを「使役文」と見なしている。「使役の研究」と題しながら実際にはこのように形態論的特徴をもつものに限定する方法に問題がないとはいえない。しかし、使役文研究の現段階にあっては、論点の拡散を避け、一貫した考察を求めるのにむしろ合理的な方法といってよい。論者は、まずキルギス語の使役接尾辞を形態論的に整理した上で、キルギス語の使役文の構文的特徴を述べ、さらに、同じ動詞語幹に異なる使役接尾辞が接続した場合の意味的な違いについて考察する。次に、一つの動詞語幹に使役接尾辞が二重に接続する場合と、使役接尾辞が一つ付く場合との意味的な違いについても論ずる。チュルク語における形式の異なる動詞使役形の意味的差異については、これまでも研究がある。しかしキルギス語に関する論者の精緻な分析結果は先行研究の不備を大きく改善するものである。

(2) キルギス語の受動文の分析は、本論文の内容の中核の一つである。論者は先ずキルギス語受動文には異なる種類のであることを述べ、これまで報告されることの少なかった自動詞を基にした受動文に言及している。次に、受動文における動作主がどのように表示されるのかという問題について詳細に検討し、そこから特異な受動文を構成する動詞群の抽出を試みている。述語が不足のない叙述成立のためにどのような意味機能を担う名詞句を必須とするかは、述語ごとに語彙的に決まっており、これを表現したものは項構造と呼ばれる。論者は動詞の項構造と統語上の格の結びつきという観点から、受動文における動作主表示を考察し、通常の受動文と特異な受動文の振る舞いの違いを明確にしようとした。今後の検証を必要とする理論上の問題が残っているが、その方向性と指摘の内容には注目すべきものがある。

(3) チュルク語には、使役文が受動の意味をもつ場合があり、この現象に着目して、受動の意味をもつ使役文の分類を行い、どのような条件のもとに受動の解釈を許す使役文が成立するのかについて、キルギス語、チュルク語のみならず、日本語や朝鮮語、モンゴル語などを対象とした通言語的観点からの検討が行われた。また、日本語の自動詞・他動詞の対応や使役・受動の派生関係と動詞価の増減の相関を、キルギス語に対比させて考察し、キルギス語に古い時代からの残存システムと新しいシステムの二層構造のあることを指摘している。議論に粗いところも見られるが斬新な内容は評価できる。

(4) 論者は、チュルク語の中でも極めて特異な使役・受動のシステムをもつトワ語と、この言語に影響を与えたとされるモンゴル語との関係を論じた。その影響関係を明らかにし、それぞれの言語の類型論的な特徴を明確にするために、中世モンゴル語資料である『元朝秘史』にみられる受動文の分析を行っている。『元朝秘史』に、現代語にはみられないタイプの受動文のあることは知られていたが、その構造は明確ではなかった。論者は、日本語受動文と対比することによって、「与格受動文」や「節接辞型受動文」という受動文のタイプを新たに提示した。また、『元朝秘史』において使役文が受動の意味をもつ場合について、アスペクトの違いが使役と受動の表現の使い分けに関わっているという重大な指摘を行っている。

この『元朝秘史』言語の受動文の分析はモンゴル語研究に貢献するだけでなく言語類型論的にも重要な情報として今後利用される可能性が大きい。

以上の四点にまとめた本論文の内容には独創的なところが多々みられ、論旨も明快で、高く評価できる。また、今後のチュルク語やモンゴル語研究に寄与する部分も少なくない。しかし、本論のテーマにおいて必要と考えられる考察の欠落もある。たとえば使役、受動と並んでヴォイス体系の重要な一翼を担う再帰についての考察は行われていない。この点は今後の研究に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年12月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。